



吉崎別院便り

バラバラでいっしょ！

になれるところ

蓮如上人北国御退去記念法要

大聖寺教区・ご門徒50名が法要に参詣

昭和26年から

綿々と受け継がれる法要



8月3日、午前10時から加賀市橋立港の近くに佇む「蓮如上人北国御退去記念碑」地にて法要が勤まりました。法要には大聖寺教区を中心とするご門徒が参詣をされ、上人の吉崎でのご苦労とご遺徳を偲びました。



吉崎別院からも参詣をしました。

毎年、この法要の導師を勤めている芳原里詩住職（大聖寺教区・妙徳寺）によると、蓮如上人が舟で吉崎をご退去された地が明らかになった昭和26年以降、絶えることなく法要が勤められているとのこと。さらに、「先達が記念碑を建てられてまで大切になさった吉崎での教化の意味と、ご退去の無念を、是非とも全国の真宗門徒に知っていただきたい。」と語ってくださいました。

導師・芳原里詩 住職



人上如蓮
地窟去退御國北
書暢光 卯辛和昭

碑面題字額（妙徳寺所蔵）

蓮如上人北国御退去旧地記念碑



記念碑建立に込められた願い

妙徳寺の前々住職・芳原政範氏が中心となって作られたとされる記念碑には、蓮如上人が吉崎をご退去される様子が詳細に記されています。

そもそも、ご退去の地が明らかになつたのは、前大谷大学教授の藤島達朗氏による精力的な調査や、（同氏は昭和26年に初めて勤められた法要の記念法話もなさっております）文中にある「小塩ノ信者小鍛冶屋五郎衛門」の末裔の方への聞き取り調査などによるものとされています。

こんなエピソードがあるそうです。芳原政範氏が、北海道礼文島に住む小鍛冶屋五郎衛門の末裔の方を訪ねたところ、当時、ご退去に協力してくれた御礼として授けられた「蓮如上人御真筆の六字名号」があったそうです。「そのお名号を譲っていただけませんか？譲っていただけないか？」と幾たびもお願ひする芳原氏に、「こればかりはどうしてもお譲りできない。何卒、ご容赦ください。何卒ご容赦ください」と。

「蓮如上人吉崎ご退去」を、単に歴史上の一ページでは済ますことのできないような、念仏と時と人との熱き鼓動を感ぜずにはおれません。

毎年、8月3日に勤まる法要に是非ともご参詣ください。

↓ 以降、記念碑建立の趣意（原文とひらがな訳）をごらんください。↓

※尚、趣意文はHPの構成上、横書きにて掲載しています。

蓮如上人北国御退去旧地記念碑建立ノ趣意

蓮如上人ハ本願寺ノ第七代存如上人ノ長男トシテ京都東山ノ大谷ニ御誕生六才ノ暮「アナタノ御一生ニ親鸞聖人ノ御一流ヲ再興シ給エ」トイウ実母ノ生別ノ言葉ヲ胸ニ困苦ノ中ニ勉強、四十三才ノトキ本願寺第八世ノ宗主トナリ宗門ノ興隆ニ努メラレタ 五十一才ノトキ真宗ノ復興ヲ妬シテ比叡山天台宗徒ノ焼打ちニアツテ京都カラ大津ノ三井寺ニ移ラレタ

文明三年七月五十七才北国ノ教化ヲ志ザシ福井県ノ吉崎ニ御寺ヲ建テ 二三年ノウチニ越前ノ国守ノ歸依ヲ初メ加賀能登ハ勿論 奥州ノ遠方ニマデ御教化ガノビテ真宗中興ノ偉業ヲナシトゲラレタ

蓮如上人北国御退去文明七年七月国守朝倉敏景公ノ勅請ニヨツテ前年焼失シタ御坊ノ本建築用材募集ノタメ家老下間安芸ノ法眼蓮崇ヲ越前大野ニ使ワシタ 或日フトシタコトカラ城主朝倉恒景ト争ヲ生ジ 之ニ真宗ノ繁栄ヲニクンデイタ平泉寺ノ宗徒ラガ合流シ吉崎ノ御坊ヲ急襲シテキタ 戦ヲ好マナイ上人ハ同年八月二十二日夜ヒソカニ瀬越ノ亭ノ小舟デ塩屋ノ浦カラ橋立ノ芳成坊ノ道場ニ避難サレタ 敵徒ガ吉崎ヲ焼払ツタ前日九月四日ノ暁 小塩ノ信者小鍛冶屋五郎衛門ノ舟デ同氏ガ船頭デ橋立ノ矢師九郎三郎等ガ乗組ミ慶聞坊ナド二三ノ弟子ヲ伴イ北陸五ヶ年ノ教化ニ名残ヲ惜マレコノ小塩ノ浦カラ若狭ノ小浜ヘ行カレタ 時ニ 上人五十七才 今ヲ去ル四百八十年ノ昔デアツタ ソノ後上人ハ堺大阪等ニ布教サレ 山科ニ本願寺ヲ建立シ明応八年三月二十五日八十五才ノ御長命デ往生サレタ 昭和二十三年蓮如上人四百五十回御遠忌ノ年ニ奇シクモ上人北国御退去ノ旧地ガ小塩浦デアルコトガ判明シタノデ

有志相計リ同信者ノ協力ヲ得テ特ニ昭和二十二年十月今上天皇陛下御巡幸ノ橋立漁港ヲ扼スル光荣ノコノ地シカモ加南観光ノ景勝ノ橋立海岸ノ中心デアルコノ天崎ニ 上人ヲ追慕シ上人ニヨツテ再興サレタ親鸞聖人ノ他力本願ノ念仏コソ、日本ノ至宝デアリ世界平和ノ基盤ヲナスモノデアルト云ウ信念ノモト平和国家再建ヘノ願ヲコメテ上人北国退去御船出記念碑ヲ建立シタノデアル

幸ニ東本願寺法主台下カラ碑面題字ヲ賜リ 金沢市ノ水野朗氏ノ力作ニヨツテ 上人ノ尊容ガ鑄造サレタノデアル

蓮如上人北国御退去

旧地記念碑建立

協賛会長 稲葉道意

昭和二十六年八月三日

寄進人 省略

発起人

芳原政範 吳比長七 彦野定次郎 亀田三太郎 氷見山宗吉 小笠与吉 山谷安太郎 増井清太郎 南 與三松 北西庄太郎 糸井長松 中谷三太郎 三浦康太郎 中井太四郎 山根千太郎 南出由松 高野愛吉 山本由松 芳原力忠

建設協参会

山下作吉 龍山 亭 川那辺修 伊勢谷巖

蓮如上人北国御退去（ひらがな訳） 旧地記念碑建立ノ趣意

①蓮如上人は本願寺の第七代存如上人の長男として、京都東山の大谷にご誕生②六才の暮「あなたのご一生に親鸞聖人のご一流を再興し給え」という実母の生別の言葉を胸に困苦の中に勉学、③四十三才のとき本願寺第八世の宗主となり、宗門の興隆に努められた。④五十一才のとき真宗の復興を妬んだ比叡山天台宗徒の焼打ちにあって、⑤京都から大津の三井寺に移られた。

⑥文明三年（一四七一年）七月五十七才北国の教化を志ざし福井県の吉崎にお寺を建て、二十三年のうちに越前の国守の帰依を初め加賀能登はもちろん、奥州の遠方にまでご教化がのびて、真宗中興の偉業を成しとげられた。

蓮如上人北国ご退去 文明七年七月国守朝倉敏景公の勅請によって⑦前年焼失した御坊の本建築用材募集のため、家老下間安芸の法眼蓮崇を越前大野に使わした。

ある日ふとしたことから城主朝倉恒景と争いを生じ、これに真宗の繁栄を憎んでいた平泉寺の宗徒らが合流し吉崎の御坊を急襲してきた。⑧戦いを好まない上人は同年八月二十二日夜ひそかに瀬越の亭の小舟で塩屋の浦から橋立の芳成坊の道場に避難された。敵徒が吉崎を焼き払った前日九月四日の暁。⑨小塩の信者小鍛冶屋五郎衛門の舟で同氏が船頭で橋立の矢師九郎三郎らが乗り組み、慶聞坊など二十三の弟子を伴い、北陸五ヶ年の教化に名残を惜しまれこの小塩の浦から若狭の小浜へ行かれた。＊
ときに上人五十七才。今を去る四百八十年の昔であった。

その後上人は堺大阪などに布教され、⑩山科に本願寺を建立し、明応八年（一四九九年）三月二十五日八十五才のご長命で往生された。昭和二十三年蓮如上人四百五十回御遠忌の年に奇しくも上人北国ご退去の旧地が小塩浦であることが判明したので

有志相計り同信者の協力を得て特に昭和二十二年十月今上天皇陛下ご巡幸の橋立漁港を扼する光栄のこの地しかも加南観光の景勝の橋立海岸の中心であるこの天崎に、上人を追慕し上人によって再興された親鸞聖人の他力本願の念仏こそ、日本の至宝であり世界平和の基盤を成すものであると云う信念のもと平和国家再建への願をこめて上人北国退去御船出記念碑を建立したのである。

幸に東本願寺法主台下から碑面題字を賜り、金沢市の水野朗氏の力作によって、上人の尊容が鑄造されたのである。

・年表との比較

- | | | | |
|----------|----------|---------|------------|
| ① 誕生 | ② 母との別れ | ③ 本願寺継承 | ④ 大谷本願寺焼打ち |
| ⑤ 堅田の大責め | ⑥ 吉崎御坊建立 | ⑦ 吉崎炎上 | ⑧ 北国退去 |
| ⑨ 山科御坊建立 | ⑩ 往生 | | |

※御退去されたのは六十一才だが、本文中には五十七才との記述あり。